慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ソンナ+Nについて：日西英対照
Sub Title	A propos de 'sonnna+N' : Etude contrastive japonais, espagnol et anglais
Author	川口, 順二(Kawaguchi, Junji)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1984
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.46, (1984. 12) ,p.209(114)- 249(74)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00460001-0249

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ソンナ+Nについて—日西英対照—(*)

川　口　順　二

0. 緒　言

名詞限定の問題は指示機能と数量操作の見地からの研究が主なものであり，その際つい見過され易い限定辞がいくつか存在する。(1) 筆者は共同研究で仏 tel についての考察を進めており，結果の一部がドルヌ他（1984）で発表されている。この tel にしばしば対応する限定辞が「コンナ「ソンナ「アンナ」(以下ソンナで代表させる）や「ソノヨウナ「ソウイウ「ソウイッタ「ソウシタ」である。又 tel には西 tal が語源的に対応しているが，西語文典にあたると簡略な記述の中にも仏 tel と異なる部分があることが見出される。他方ロマンス語を離れて英を考えると such が頭に浮ぶ。しかしこれも tel や tal と異なるようである。

本稿はこの複雑な対応関係を整理する第一段階として，日西英に共通するテクストを設定し，その調査から「ソンナ」へのアプローチを試ることを目的とする。

三言語に共通なテクストというのは当然翻訳関係をもつテクストのことで，同時に文体的特性がいわゆる「文学的」探究の対象でないものが望ましい。そこで A. Christie の *Curtain. Poirot's Last Case* とその日，西訳をエグゾースティヴなデータ採集の対象とし，他に文献にあげる同作家の六つの作品を二次的コーパスとして選んだ。

直接の目的はソンナの背後にあると想定される発話操作，つまりソンナ操作の分析である。I で理論的考察を紹介し II では対照的にいくつかの点を論じていく。

I. 仮　説

ここではまず仏 tel で考察された基本的仮説を紹介し，次にソンナに関する仮説を提出する。

I. 1. tel 操作

ここで問題とするのはドルヌ他 (1984) の第一章で提出された un tel N に於ける tel 操作である．これは例えば

(1) (厚生大臣提出の社会保障制度改定案について) Un tel système aboutirait à faire payer les dépenses de santé plus cher aux riches qu'aux pauvres (ドルヌ他 (1984), p. 38)

のようなもので，そこでは un tel N が何らかのアスペクト，モダリティ操作を伴う文にしか出ないこと，つまり「事行を時間軸上の特定の一点に位置づける」ような文中には契起しないという事実[2]，及び *le/*ce tel N のように「あるメンバーを他から区別して個別化する」ということがない (p. 40) という事実などから次の仮説がたてられている。

(2) 問題になっている個別的出来事，物 (Nで要約) のある性質に着目し，その性質に規定されるようなNのサブクラスをつくる。そしてそこからひとつのメンバーを代表として取り出し，総称的用法により，そのサブクラスを何らかの形で性格づける。tel により照応される性質は文脈から判断される事になる (p. 39)

さて tel の用法に関する制約は同源の西 tal にそのままあてはめることが出来ない。それは西では un tel N が tal N に対応し，不定冠詞 un は現われない傾向にあり[3]，複数形が仏 de tels N に対し tales N となる，という事を除いても，定冠詞と tal N が共起しうる点を見れば明らかである。

(3) 〔母親の再婚した相手について〕 a) "Rotten little bounder too!" he said savagely. "I can tell you, Hastings, it's making life jolly difficult for us. [...] Oh, this fellow! [...] The fellow is an absolute outsider, anyone can see that.

He's got a great black beard, and wears patent leather boots in all weathers! But the mater cottoned to him at once, took him on as secretary—you know she's always running a hundred societies?" I nodded. "well, of course, the war has turned the hundreds into thousands. No doubt *the fellow* was very useful to her. But you could have knocked us all down with a feather when, three months ago, she suddenly announced that she and Alfred were engaged! (*Styles*, p. 6-7)[(4)]

b) naturalmente, con la guerra, esas cien sociedades se han convertido en mil. Hay que reconocer que *el tal sujeto* ha resultado muy útil. (p. 9)

c) それでだ，むろん，戦争のおかげでその交際というやつがますますさかんになってきたのさ。その男がおふくろにとっても役に立っていることはあきらかなんだがね (p. 10)

この他にも tal を tel で訳せない例が存在する。例えば，

(4) Numerosos vocablos considerados como autóctonos son de origen incierto, pues no resulta fácil precisar a qué lengua primitiva pueden pertenecer. Resultado éste, como se ha dicho antes, de la ignorancia que tenemos acerca de *algunas de tales lenguas*, por no hablar de la ignorancia total de *otras*. (I. Iordan y M. Manoliu, *Manual de lingüística románica*, revisión, reelaboración parcial y notas por M. Alvar, la. Reimpresión, 1980, Madrid, Gredos, II, p. 100)

のイタリック部分は，*quelques-unes de telles langues とは訳せず，quelques-unes de ces langues とせねばならない。仏語で書かれた西文法 Bouzet (1978) はこの辺の事情を反映させて，「tal は既に言及された人や物を照応する上で指示詞の価値を伴って用いられることが多い」として，

(5) El tal autor y los tales libros... "*L'auteur et les livres en question*; *cet* auteur, *ces* livres" (p. 75)

を挙げる。しかし(5)は定冠詞と共に用いられているのでむしろ(4)の方が判り易い。(4)で tales lenguas はラテン語化される以前にあった諸言語のことで，これが一つのクラスを構成する。そのクラスのうちのいくつかが algunas で表わされているのである。一般に N_1 de N_2 の形に N_1 が数量表現であり，N_2 から N_1 を抽出する関係がある時は N_2 が一つのクラスとして限定される必要がある。従って algunos N が単に N で示される概念のいくつかの発現 occurrences を示すに止まるのに対し，algunos de los N は何らかの限定により構築されたクラス (los N) からいくつかのメンバーを抽出することになる。[5]

問題は(4)で tales lenguas が限定されたクラスを同定的に表現していることで，仏 telles langues にはこの機能がない。これは *quelques-unes de + les telles langues が定冠詞に対する tel の拘束のため不可能なこととも関係するが，最終的には tel と tal の相違がポイントになる。[6]

次に such についても一言述べておこう。such a N, such N の諸限定表現とのかかわりは複雑だが，以下二つだけ例を挙げる。

(6) For example, *the most general such rule* will specify that genitive NPs are marked (in general, with exceptions, etc.) by-*s*; *another rule* will specify that [...] (Radford, *Transformational Syntax*, Cambridge, 1981, p. 351)

(7) *A second such argument* can be formulated in relation to agreement facts (*Id.* p. 186)

(6), (7)共仏 tel にならない理由の一つは un tel N は一般に形容詞や制限関係節を付加できないことで，ドルヌ他 (1984) で言及されている。

さて (3b), (4)〜(7)により tel についての仮説(2)が tal と such にはそのままではあてはまらない事を見た。これらの事実の解明には夫々のマーカーについて tel で行ったような細かい分析が必要となるが，これは本稿の目的とずれてしまうので，以降直接の問題とはしない。我々はむしろ

ソンナ操作を中心に見ていくことになる。I. 2. でその大まかな仮説を述べ，IIで対照的に考察を進める。

I. 2. ソンナ仮説

I. 2. 1. 照応

ソンナNの重要な機能の一つに照応がある。Halliday & Hassan (1976) に従えば文脈照応/外界照応の対立があるが，ソンナにもこの両者がある。ここでは文脈照応を中心に考えていく。ある文脈に於てソンナNが現われる時，これを含む文をQとおこう。又ソンナNは照応であるから，その照応の対象をxと置き，xを表わす部分を含む文（又はその集合）をPとしよう。前方照応のケースをとると，

(8) P(x)...Q(ソンナN)...

という形が考えられる。例えば

(9) a) This man had begged the doctor in attendance to 'give him something that would finish it all'. The doctor had replied: 'I can't do *that*, old man.' (p. 96)

b) El médico contestó: "Me pide usted algo, amigo mío, que no puedo hacer" (p. 130)

c) 「そんなことはできませんよ」と医者は答えた。(p. 141)

でソンナコトは男の懇願の内容を照応している。しかし記述の段階ではこれを「医者が患者ニ苦シミニケリヲツケルモノヲ与エル(コト)」ととらえる。これは述定関係[7]を形式的に記すかわりにより解り易い形に書き直したものである。この述定関係に諸発話，述定操作が加わり，最終的な痕跡としてテクストに観察される発話文が得られる。従って「コノ苦シミ」や「与エテクレ」などは発話，述定段階での指示値計算の対象になる。

さて照応の対象としての述定関係がxのことで，このxを具現するのがPである。又 (9c) のソンナコトがソンナN，これを含む文がQである。

(8)の枠組は x，P，Q について比較的厳密性を欠くような規定しか与えていないが，これは分類対象となるデータを包括的に扱う必要性と，他方ソンナNをより広い見地から位置づける時の有効性を考慮に入れてのこと

である。あく迄痕跡としての発話文形態の分類だが直観的に把握しやすいと思う。

さて(8)から出発して一応分類が可能になるが，それは P, Q, x, ソンナNの分布特性とそして他のいくつかのパラメーター導入により記述の目安を構築していくことにつながってくる。分類は I. 2. 3. で行うことにしてその前にソンナ操作の基本的仮説を述べていくことにする。

I. 2. 2. ヨウダ/ヨウナについて

佐久間（1983）は

(10) 語源主義でいくと，なるほど，「こんな，そんな，あんな，どんな」は「こ・の・よう・なる，そ・の・よう・なる」等々の連語に帰するので，「こ」や「そ」だけが代名詞で，それと他の語との連なったものと解すべきだということにもなりましょう。が，現に今日の人たちは，「こんな，そんな」を連発しているのでして，よほど「あらたまった」「よそいき」の場合でできなければ「このような，そのような」などという言葉づかいはしません。普通の用語として「こんな」等々の形を確立してしまったのですから，これをこれとして取扱わないのは，現代語法としては不当です。[...]「コンナ」を「このような」にパラフレイズすると「コンナニ」は始末がつかなくなります（p. 7〜8）

と主張している。ソンナを独立させて考察の対象とする，というのはむろん分類段階で正統なものであるが，背後の操作究明にはソノヨウナと切りはなしてしまうのは問題があろう。又いずれにせよソンナとソノヨウナの違いを記述する必要がある。ここではヨウダ/ヨウナから話を始めよう。

(11) 太郎ヲ殴ルヨウナコトハ止メロ！

を Q(x ヨウナ N) と置こう。操作段階ではソンナはソノヨウナとパラフレーズ出来(る事が多く)，このうちソがxへの照応と考える。そこで(11)はソンナNを導入すると

(12) （太郎ヲ殴ルナンテ）ソンナ事ハ止メロ！

と書きかえられる。但し操作として何が起っているのかを明記する必要が

ある，それなくしては佐久間（1983）の反論の対象となる。

そこでまずx（ノ）ヨウダから考え始めよう。寺村（1984 a）はx（ノ）ヨウダについて用法に（i）「真実かどうか確言できないが，自分の観察したところから推しはかって，これが真実に近いだろう」という「推測」と，(ii)「真実でないことは分かっているが，ある対象が真実と似た様相をもっている」という「比況」の二つがあり，「両者は必ずしも截然と区別できない場合がある」がいずれにせよ「その中心的意味は，「真実に近い」ということだといえる」と記している（p. 243）。この考え方に我々が基本的に賛成である理由はおって明らかになる。

さて次にxノヨウナNをとると，永野（1969），吉田（1971），国研（1951）などでは（i）の推測として挙げる例が

(13) 俺には彼の気持が解るような気がする（国研 *id.*, p. 278）

(14) 馬鹿に判ったような顔して一人で思っているんじゃないかしら（*id.*）

(15) 私が入った昭和十四年ころは夢中だったが，今考えて見ますと，昔の人のバッテイングというものは，どこか荒いような感じがしていますが，今のバッターは非常にシュアなんですね（*id.*）

の類のみで[8]，Nに強い制約があることに気づく[9]。但し吉田 *id* は「柔らかな不確かな断定用法」として

(16) 旅人に足を留めさせまいといして，行き暮れたものを路頭に迷はせるような掟を国守はなぜ定めたものか（p. 331）

(17) 会社の物えりに，おもちゃなんか買ってきてくれたことは，めったにないが，買ってくれるようなときには，きっと，もののいいのを買ってくれるので，彼はおとうさんが好きだった（*id.*）

(18) そこは畳の凸凹した，昼でも日の光の通はないやうな薄暗い八畳であった（*id.*）

を「例示の意味も含まれている」と注記しながらも挙げている。

この「例示」とは，国研 *id.* が「ある事物が他の事物に関する一例であるような関係」と規定したもので，ヨウナとヨウニの二形のみを挙げる。

永野 *id.*, 吉田 *id.* も同様である。次に例を一つあげる。

(19) ワールド・シリーズのような大事な試合になれば，三日目か五日目に出ますね（国研 *id.*, p. 277）

他方国研 *id.* は「内容を指示することを表わす。ある事物が他の事物に等しいという関係」として

(20) 以上のような判断をすると，ベルリン封鎖解除を基にするソ連の態度の急変にも影響を及ぼさないとはいえぬ（p. 277）

などを挙げている。永野 *id.* は「一致とか帰着といった関係」（p. 315）と表現し，「第一章に示したような方法」を挙げる。

最後に比況については問題なくxノヨウナNの形をとる。

(21) 樽のやうな腹を揺すぶって，母親は青空のやうに笑っていた（吉田 *id.*, p. 328）

x(ノ) ヨウナ N は以上見てきたように，(a) N に強い制約を伴う推測，(b) 例示，(c) 一致，(d) 比況の四つの解釈がある。このうち...(ノ) ヨウダの云い切り形は (a) と (d) にあり，(c) は

(22) この原理は次のようである（国研 *id.*, p. 276）

であるが，これは必ず「次ノ「以上ニ述ベタ「以下ニ述ベル」など明示的に文脈指示を表わすものが点線の位置に来る。又点線の部分が名詞的なものにノをつけたものでなく，いわゆる動（但し上記「以上ニ述ベタ」など除く），形容詞の連体形だと，解釈は (a), (d) に傾き，

(23) 弟は勝気な健康な子供であった。れれがいつの間にか何かしら憂鬱を感じるようになった（吉田 *id.*, p. 329）

を (c) と解釈したとしても，

(24) 弟ハ何カシラ憂鬱ヲ感ジルヨウダ

は (a) の解釈となる。

又 (b) は...ノヨウナNの形であり，動，形＋ヨウナNの

(25) 中共は対外貿易の再開を熱望しておりそれを促進するような措置をとっている

は国研 *id.* のように (b) と解釈するのは議論の余地が残る。というのは，

分類のみを目的とすると言語の諸現象の連続性を見失ないがちで[10]有意義な一般的特性を見失なう危険を排除できないからである。さて(25)を

(26)　コノ措置ハソレヲ促進スルヨウダ

と変えると，これは(a)の解釈となろう。又(24)や(26)は文脈を変えれば(d)の解釈を持とう。

以上の観察をこれから述べる観察と組み合わせて行くと，…ヨウダの形を寺村 *id.* に従って推測と比況の二つの解釈を持っと規定できるようになる。[11]

例示と一致についてはより根本的な考察が必要となる。まず推測と比況に共通するのは，ある被比較項Aを比較基準項Bと比較する比較操作である。先に引用した寺村 *id.* の両用法の規定からも考え浮ぶように，(i)ある関係Aをその補集合B＝A'と想像上比較した時，何らかの理由（「自分の観察したところ」）から帰納してAを選ぶ—但しこの場合Bを完全に排除するわけではない[12]—「推測」，(ii)ある関係Aを他の関係Bと想像上比較して，その類似性を云う「比況」，の両用法にはAとBが存在する。次に例示を見るとAはBのメンバーの一つであるし，一致はその特殊ケースで，比較するとAはBと同定されるタイプと云える。推測のみ他の用法と異って見えるのは，比較操作の対象となる項の性質（AとBは補い合う述定関係である）によるもので，基本的には同じ操作を含む。他方比較以外にも介入する操作が諸用法を相違化していく。この問題は興味深いがここではこれ以上立ち入らない。IIの記述が解決の糸口になると予想されるのである。[13]

I. 2. 3.　x（ノ）ヨウナからソンナNへ

比況，例示，一致はすべて類似した操作だが，ここでソンナNを考えると，推測の(13)～(15)はすべて

(13′)　彼ノ気持ガ（ドウヤラ）解ル，（ドウモ）ソンナ気ガスルンダ

(14′)　（馬虚ニ）ヨク判ル，ソンナ（フウナ）顔シテー人デ思ッテルンジャナイカシラ

(15′)　昔ノ人ノバッティングトイウモノハ，ドコカ荒い，ソンナ感ジガ

シテイマスガ…

と書きかえられる。しかしここでソンナN自体が推測の意を持つとはいいにくい。まずNについてはxヨウナNの推測用法と同じく強い拘束があるが，他方ドウヤラ等の表現がソンナN自体を修飾できない。そして何よりも(13')〜(15')でソンナNを「真実かどうか確言できないが，自分の観察したところから推しはかって，これが真実に近いだろう」の判断対象とは解釈できない。佐久間（1983）の引用(10)にある通りソンナをソノヨウナと書きかえてその中のソに照応機能を持たすことは分類的見解のみからは意味がないが，その理由の一つがx（ノ）ヨウナNをソノヨウナN，ソンナNにすると解釈分野が異なってくるという事実である。

比況は比較基準項Bに被比較項Aを比較して構築される。その時A，B間には必ず何らかの共通する性質がBから措定され，その性質を共有することにより構築されるサブクラス[14]にAが所属させられる。同時にその特性を除いては，A，Bがお互いに全く異なる分野に属す時比況が構築されるのである。ところでソンナNの形で比況というと，例えば犬を指して私ハ/モコンナ猫ガ欲シイという類の筈だが，この解釈には他の情報が必要である。(21)を変えて考えてみよう。

(21′) i) 私ノ家ニハ大キナ樽ガアルガ，父ハソンナ腹ヲシテイタ

ii) 樽トイウノハ中ガフクランデイル。私ノ父モチョウドソンナ腹ヲシテイタ

iii) (樽を指しながら)オ父サンノオナカハコンナ大キナオナカナノヨ

つまり比況の場合はBの特性が左方文脈で明示されているか，又はソンナAdj N（ソンナ Relative N）のようにソンナNの内部で明示される。この類の用法についてはII. 4. で再びとりあげるが，英，西（そして仏）では伝統文法的意味での比較表現（as Adj as, tan Adj, 等々），such や強意の very などが対応するのが興味深い。

例示が比況と異なるのは，AとBがお互いに異なる分野に属するかわりに，AがBの分野に属し，Bというサブクラスの一メンバーであるという

点である。このサブクラス構築についてはは英，西（そして仏）ではII.2.で見る複数化現象と対応することがあるという事実が間接的論拠となる。又

(27)　太郎トカ花子トカ，ソンナ人ガタクサン来テイタ

では太郎と花子がソンナ人の集合のメンバーと解釈でき，例示と分類されるが，

(28)　太郎ハモウイナイケド，アンナ人ト又会エタライイナア

では太郎が除外されている可能性がある。除外なら比況又はそれに近い解釈となる。

最後に一致については，先に見たようにxノヨウナNのxに大きな拘束がある。コ・ソ・アはこの拘束に抵触しない照応形式であり，特に後方照応や言語外照応で明確に現われる。後方照応についてはII.1.で考察する。言語外照応，例えば

(29)　（何かを拾い乍ら）オヤ，ココニコンナモノが落チテイルナ

は落ちていたものの特性からサブクラス構築があり，外界指示的には無論唯一特定の対象が問題とされているが，言語内の操作としては唯一のメンバーから成るクラス構築ではない。その時何らかのモダリティ，特に評価のタイプのモグリティが介入する。モダリティ操作は他の用法にも介在するが，一括してII.3.で扱うことにする。

以上いささか抽象的になったがソンナ操作を論じた。簡単にまとめると次のようになる。

x(ノ)ヨウナNは用法に a) 推測，b) 例示，c) 一致，d) 比況の四つがあるが，このうち a) と c) には強い拘束がある。又xノヨウナNをソンナNとすると a) が排除されお互いに類似性の高い b), c), d) が残るがこれはすべてサブクラス構築を基礎としている。これがソンナ操作の基本で，これに他の操作が組み合わさり，発話文中に観察される諸用法が作られる。

ここで再び(8)に戻ろう。この枠組ではまずソンナの出ない

(30)　i) Q (x (ノ) ヨウナN)　[cf. (11), (13)〜(21)]

が出発点である。ソンナNはxにソを代入しソノヨウナNを作ってから導き出されるが，各段階に於て意味的フィルターに反影されるような操作上の特性が加わる。ソンナNとソノヨウナNの間にはしばしば互換性があるがそうでない場合もある。こうして

ii) Q (xc, ソンナ N) —但しcはナンテ，トカ，ϕ などの x 導入要素，[15] —：主に例示用法

が導かれる。その他

iii) P (x) ... Q (ソンナ N) ...：前方照応

iv) Q (ソンナ N) ... P (x) ...：後方照応

v) ϕ Q (ソンナ N)：言語外照応

などを作っていくことができる。

II. ソンナ操作記述—対照的考察

I. でソンナ操作の基本的仮説を提出した。又(30)の枠組みは日の記述に用いられるが対照的アプローチを取る時はむしろ形—これは(30)のi)～v)を指す—にこだわらず，意味解釈とその背後に介在する諸操作を調査することになる。

例をとろう。

(31) a) 'Hullo, Hastings, still about?'—'I couldn't sleep [...] You keep late hours yourself.' I remarked. —'I've never been an early bed-goer. Not when there's sport abroad. *These fine evenings* aren't made to be wasted.' (p. 45)

b) sobre todo cuando hay algo interesante fuera. Es una pena malgastar *unas noches tan magníficas como las de ahora*. (p. 61)

c) こんなすばらしい夜をなにもしないで過すわけにはいきませんよ (p. 63)

英西日夫々文構造が大きく異っているが，these fine evenings の部分に注目すると，英は指示詞複数，西は比較構造，日はコンナ Adj N となっ

ている。(31)から云えることは，まず these という指示詞はこれをグローズする時比較構文となる用法がある（西より）。次に複数 these, unas... como las de ahora は日にそのまま移すことができない。これは日の名詞形態論上の問題だが，他方比較操作が含む意味的複数がソンナでマークされ得る。そこで(31)から比較及び複数化という操作の観点に立つ考察を促すが，これを単純な形態，構文問題に還元するより，むしろ発話文背後にある言語的諸操作の段階から問題提起をしていく。

作業仮説としては，英西日対照により，日ではソンナNの現われるコンテクスト，特にQの意味的条件がはっきりしない時，英又は西がそれを明示化する事がある，という想定をする。文が全く異なった内容に解釈されなおしているケースを除き調査をしていく。

紙数の関係上，以下 1）後方照応，2）複数化，3）モダリティ，4）比較，の4つの点を中心に論じていく。又 like this/that, the sort of N, N of this sort; esta clase de N, N de este tipo, N así など興味深い表現が多いが，これは別の機会に論ずることにして，今回は必要な点にしか触れない。

II. 1. 後方照応：Q（ソンナ N）...P (x)

まず前方照応について話を始めよう。

(32) a) You understand your job now. [...] You can listen to conversations, you have knees that will still bend and permit you to kneel and look through keyholes—"I will not *look through keyholes*." I interrupted hotly. (p. 62)

b) dispone de unas rodillas que todavía pueden doblarse, lo cual le permitirá arrodillarse para aplicar un ojo a las cerraduras... —Nunca haré *tal cosa*—le advertí, indignado. (p. 85)

c) [...] きみの膝はまだまがるのだから，かがんで鍵穴から覗くことも—」「鍵穴から覗くなんてご免ですよ」と私はかっとなって言った (p. 90)

英日は P(x)...Q(x) の形で繰り返しをしているが，西は tal cosa で前方照応している。日のナンテは注15で言及したx導入要素の一種だが，このナンテはナンカと類似した表現で，鍵穴カラ覗クコトカソレニ類シタコトという概念上のサブクラス構築とその全体を一括して拒否するというモダリティ操作を背景にもっている。このモダリティについては後で問題にする。次に

(33) a) He seemed to *think that* a lifetime spent as Poirot's had been was in itself a rich reward and that [...] (p. 55)

b) Parecía *pensar que* una existencia como la de Poirot constituía en sí misma una rica recompensa (p. 75)

c) ポアロが過してきたような生涯は，それ自体が貴重な報酬であり［...］，とそんなふうに彼は考えているようだった (p. 78)

日は…ト考エテイルヨウダッタとするかわりに…トソンナフウニ，つまりP(x) c Q(ソンナN) の形にしたわけで，P ト Q (「イヤダト云ッタ」) の類でQが発話，感覚又は思考を表わすVであり，P がその対象の内容を表わす時これを P(x) ト，ソンナコトヲ Q/ソンナフウニ Q と書きかえることができる。ところでこのような処で何故ソンナNが出てくるのだろうか？ 本稿は ソウ（云ッタ/考エタ/感ジタ/キコエタ等）に言及できないが，ソンナNを用いてソンナ事ヲ/ガ（云ッタ等）と云う方がPを伝達する者がPに距離をおく，つまり誰々がPト云ッタという伝達に於てPの正確さについての責任をとらないという印象を受ける。(33)では特に seemed to think の seem がこの傾向を強めている。これは日でもヨウダッタに現われるが他方Nのフウが(13)～(15)で問題にした名詞類に属すこととも関係する。[16]

さて本題の後方照応に移ろう。

(34) a) I was home from Burma—my wife died out there, you know. Don't mind telling you I completely lost my heart to her. (p. 37)

b) No me importa reconocer que me enamoré perdidamente

de ella (p. 51)

c) こんなことを言うのはなんだけど，わたしはバーバラにすっかり心を奪われたんですよ (p. 52)

(34 b) はこれを

b') No sé si me permitirá usted que le diga *tal cosa/eso/esto*, pero creo que debo reconocer que me enamoré perdidamente de Bárbara

と書くこともできる。

さて木村 (1983) はコンナの後方照応を扱い，

(35) こんな夢を/*は見た。腕組をして枕下に坐っていると，仰向けに寝た女が，静かな声でもう死にますと云ふ。

などについて，

(36) N [「夢「コト」等] はその内容が示されていない限り聞き手にとっては未知の対象である。話者はコンナNでとりあえずその対象をめぐる事柄 (出来事) を聞き手に伝えることを意味する。後文でその「内容」を充実させる予定のある話し手にとっての当面の意図は，その対象の存在をひとまず聞き手に知らしめることである。(p. 75)

と述べ，他方

(37) 主題は言う迄もなく既知なるもの (或いはそう扱われるもの) の位置，即ち何らかの意味で話し手と聞き手の間で共通の理解が現に成立している自明の対象のための位置のはずである (*id.*)

ために，(35) で「ハ」がおかしくなるとする。又

(38) それからこのことは/??が公にはされていませんが，あれは本当は事故死ではなく自殺なのです

のような例でコノNの後方照応は述部が独立主文として終止できず，「ガ「ケレドモ」を伴う従属節のような形で文末終止のまま後方につながっていく傾向が強いとし，「このような現象も [...]「コンナ + 名詞句」の後方照応的用法には存在しないものである」(p. 77) と云っている。(34 c)

はこの主張に対する反例である。実際,

(39) *コンナコトヲ云ウノハナンダ。ワタシハ…

は許容されず，又 (34 c) を少しかえて

(40) コンナコトハイッチャイケナイノカモシレナイケド…

は許容されよう。ハの説明，(36)，(37) も従ってこのままでは認められない。又木村 *id.* の

(41) わかりました。このことは信じていただきたいと思いますけれど，国近を殺したのはあたくしではございません

という文は,

(42) コンナコトハ信ジタクナイト思ウノデスガ，国近ヲ殺シタノハ花子カモシレマセン

としても良いのである。

問題のありかは恐らく (36) の考え方，及び

(43) 「コンナ」とは〈さま〉を指示し，同時に〈さま〉を表わす指示詞である (p. 73)

という考え方が発話に於る諸操作の観察を邪魔したのではないか，という辺ではないだろうか。(42) については信ジタクナイの否定要素がソンナを許容させる鍵である。他方 (36) の N についてのコメントは Halliday & Hassan (1976) が general nouns と呼んだもの全体にかかわるもので (*id.* p. 274 sqq.)，ソンナ N 一般に問題とされる性質のものである。以上の観点から読みなおすと木村 *id.* は示唆に富む好論文である。

否定の問題は II. 3. で扱うのでこれ以上述べない。又

(42′) コンナコトハトックニ知ッテルト思ウケド，(知ラナイカモシレナイカラ一応云ッテオクト) 明日花子が料理ヲ作ルンダ

は否定要素が無いように見えるが，後述するようにモダリティ操作に否定的要素が入っていると考える。

とすると (35) で「ハ」が許容されないのは，より一般的，発話理論的な「ハ」の特性から考えることになろう。Culioli (1980), Culioli (1981) など参照。

さて話を戻すとソンナNに対応する後方照応機能は (34 a, b) のような Q that/que P の他に

(44) a) Nevertheless I will tell you *this*. X was on intimate terms with Etherington (p. 21)

b) No obstante, le diré a usted *esto*: X tenía una amistad íntima con Etherington (p. 28)

c) だが，それにもかかわらず，こういう事実があったのだ。xはエザソントンと親しく交際していた (p. 28)

がある。c) はコウイウ N を使っているがコンナ Nに置きかえられると思われる。コウイウNについては後述する。さて (44a) の this の用法は，Wald (1983) の論じる new-*this* を思いおこさせる。この論文によると初出の指示対象に this N の形を与えるのは新しい現象であり，統辞論的に a N といささか異なり，又談話レヴェルから見ると普通後のコンテクストで問題とされる対象を指すという。Wald *id.* の例を一つ見よう。

(45) Near the end of it Baldwin made one request of Nelson. What was it? the reporter asked. Well, said Baldwin, he had *this* girlfriend [初出] out in Wisconsin, and perhaps Nelson could refer to him in his story as a husky ex-Marine (Wald (1983), p. 94)

new-*this* と後方照応の this は Wald *id.* の云う topicality の段階では類似する。又次に見るようにaと交替できる点も同様である。相違はN段階での性質の差のように思われるが，これはデータ不足の為はっきりしていない。

さて後方照応の a N は，次のようなものである。

(46) a) I have known *a case*... An old brute [...] (p. 33)

b) Fíjate: sé de *un caso* que... Un viejo bruto [...] (p. 45)

c) あたし，こんな例を知ってるわ…血も涙もない老人がいたの [...] (p. 45)

英 such a N は仏 un tel N と同様後方照応には適しにくいようである。

西はそれに対し，(34 b') のタイプがある。(35) の西訳は

(35′) Otro día soñé *tal cosa*: yo estaba sentado a la cabecera con los brazos cruzados, y una mujer que se tendía de espaldas me dijo en voz baja que ya se iba a morir

を作ってみた処許容された。

後方照応は前に x (ノ) ヨウナ N で論じた用法のうち一致に当る。次ニ述ベルヨウナ N と解釈するわけである。先に見た木村 *id.* の (36) での N について云われている事，Halliday & Hassan (1976) の general nouns の考察などから考えると，ソンナNの機能の仕方はやはり種々のタイプを含むNのサブクラス構築があり，同時にそのうちのひとつのメンバーを問題にしながらもその特性，つまりそのメンバーを他のメンバーから区別するような特性が未だに共発話者に与えられていないため，何らかの期待を相手に与える，という談話レヴェルでの結果が得られると考えたい。木村の指摘する「ガ「ケレド」などとの共起など未だ正確に把えきれていない点が残るが，これは将来の問題としよう。

II. 2. 複数化

日の名詞複数形態は部分的には繰り返しによる「人々「家々」の類の他，「達「共「ナド」の接尾辞使用があるが，全体としては必ずしもマークする必要がなく，又しにくい事も多い事は良く知られている。しかしこれはあく迄形態上の問題で，意味的な見地から見ると部分的だが興味深い現象に気づく。次の例を観察しよう。

(47) a) '[...] There was one rather big one [=book]. It had a brown paper cover on it and I just pulled it out to see. After all, one never knows, does one? And what do you think it was?' 'I've no idea. First edition of Robinson Crusoe or something valuable like that?' 'No. It was *a birthday book*.' 'A birthday book? What's *that*?' 'Well, they used to have *them*. Goes back a long time. [...] Anyway, it was rather battered and torn. (*Postern*, p. 84)

b) —No. *Un libro de nacimientos*. —Un libro de nacimientos... ¿Y qué es *eso*? —Antes, hace ya mucho tiempo, se usaban *tales libros*. [...] *Aquél* estaba destrozado, roto. (p. 93)

c) 「バースデイ・ブック？　なんだい，それは？」「昔の人はそういうのを持っていたのよ。ずいぶん昔のものだわ (p. 134)

問題は they [＝一般的解釈] used to have them の them, tales libros, ソウイウノである。英について考えると，ここの them は単に可算名詞が二つ以上あってそれを指示する為に用いられる複数とは全く異なる。むしろある対象——(47) では見つけ出した一冊のバースデイ・ブック——から出発して複数化によりその対象の属すクラス——但しこのクラスについては後で異なる見方を示す——を総称的に示すものである。日ではNトイウモノハの形で典型的に現われる。[17] (47) は昔ノ人ハソンナモノヲ持ッテイタモノヨとも訳せよう。この例についての考察を進めるにはいくつか他の問題を考える必要がある。

ソンナNに関して興味深い複数化は指示（形容/代名）詞 these/those, estos/esos/aquellos（アクセント記号は抜かして考える）である。例えば夏の避暑地を探す Treves が，

(48) a) For twenty-five years now I have been to the Marine Hotel at Leahead—and now, would you believe it, the whole place is being pulled down. Widening the front or some nonsense of that kind. Why they can't let *these seaside places* alone—Leahead always had a peculiar charm of its own—Regency—pure Regency (*Zero*, p. 48)

b) ¿Por qué no dejarán en paz a *estos pueblos costeros*? (p. 50)

c) どうして，あの海岸の土地を，そっとしておかないのだろうな (p. 66)

と嘆く時 (47) と異なり these Adj N/estos N Adj の形が現われることに注目したい。日は明らかに英と違うことを云っている。アアイウ海辺ノ土

地（ッテイウモノ）ヲのような訳が適切だろう。

さて Tamba (1981) は un de ces N の用法として (i) 分割—言語外指示又は照応により定位される複数のNのクラスからひとつのメンバーを抽出 (une de ces patiences qui étonnent le monde) と，(ii) 強い度合，感嘆—質的限定により構築される抽象的クラスを出発点として自己指示 auto-référence 操作による強い度合の表現 (il a une de ces patiences !) の二つを挙げる。(i) と (ii) は一見共通するようなクラス構築があるが，(i) では問題となる全体 (ces patiences qui étonnent le monde) が発話原点又はその代表に定位され，(ii) では抽象的な発現のクラス classe d' occurrences abstraites が問題となる。他方両者共 ces N が抽象的に規定される総称 (cf. les mères 母親トイウモノ）の価値を排除する，と述べられている。

この最後の点についてもう一度(47)を見よう。細かい議論をするスペースがないが，最終的には *a birthday book*→（複数化によるクラス指示，Carlson (1977) 参照）*birthday books*→(birthday books を特性から books のサブクラスとして構築) *these books*→(they used to have) *them* のような再構成を考える。そこで them は前に総称的と呼んだが，むしろサブクラスを問題にするというべきであろう。このサブクラス指示に西 tales libros, 日ソウイウノが対応する。次に

(49) a) —You had *an attack*— '[...] Yes, Yes. *They* are sometimes, *these attacks*, painful to witness. Curtiss, I think, is not used to *these attacks of heart*.' (p. 137)

b) Ha sufrido usted *un ataque*... [...] —Sí, sí. Se dan *esos ataques*... Siempre resultan impresionantes para los testigos. A mí me parece que Curtiss ne se halla habituado a *tales escenas* (p. 184)

c) あなたが発作に襲われて—」[...]「うん，この発作というやつは見ているほうが辛いものだよ。カーティスは心臓病の発作をあまり見なれていないんだろう (p. 203)

を見よう。an attack [that Poirot suffered] → these attacks [of the kind Poirot suffered] → these attacks of heart の動きは日の発作→コノ発作トイウヤツ→心臓病ノ発作というように反影されている。[18] ここで these attacks, esos ataques, コノ発作トイウヤツについてこれが attacks の総称とは云えず，むしろサブクラスが問題にされていると見るべきである。

最後に

(50) a) 'I have *a little idea, a very strange, and probably utterly improbable idea.* And yet—it fits in!' I shrugged my shoulders. I privately thought that Poirot was rather too much given to *these fantastic ideas.* (*Styles*, p. 73)

b) tengo *una pequeña idea*; es *una idea muy extraña y quizá completamente imposible*, pero encaja. —Me encogí de hombros. Pensé para mí que Poirot era demasiado aficionado a *esas ideas fantásticas.* (p. 92)

c) 「わたくしに少々考えがあります，たいそう奇妙な，そしてたぶん，まことにありうべからざる考えなのです。けれど—それがぴたりとあうようなのですよ」 私は肩をすくめた。自分としては，ポアロがそんな夢みたいな考えに少々溺れすぎているんじゃないかと内心考えていた (p. 114)

(47)～(49) と同じタイプである。但し these ideas, esas ideas, ソンナ考エのように質限定を抜かすと意味が異ってくる。例えば c) ではポアロの溺れる考えが左方文脈にのみ規定されるが，夢ミタイナの導入がサブクラス構築をずっと明確にしている。発話者の評価操作という重要なパラメーターに再びぶつかったようである。

II. 3. 評価操作

湯沢 (1981) はヤウナが種類を表わす用法を説いた後，そこから例示の用法が出るとし，「へり下る意味をもって自己に用いることがある」と云って

(51) 芸者も多いに，名もないわたくしのよふな者につながれて……
(p. 499)

を挙げている。

コーパスに於てソンナNに当る英，西はNの前に the, this, these, my, a, such, this kind of; el, este, estos, mi, un, tal, esta clase de 又Nの後に like this, of this kind/sort; como éste, de este tipo, así など枚挙にいとまがない程の多様な限定辞を提出する。他方代名詞も種々あるが，ここで人称代名詞をとると，

(52) c) ええ，わたし，自分の欠点は知っています。でもこの欠点は一生棄てたくないと思いますわ。だってやっとジョージがこんなわたしに我慢できるようになったんですもの (p. 176)

に対しては

(52) a) George has just got to put up with *me* (p. 119)
b) George no tendría más remedio que aguantár*me*los (p. 161)

のような形が対応する。又日はコンナ太郎のように固有名詞にもソンナが付くが，西でも似た現象がある。但し日，西が一致するとは云えない。[19]

さて (49) や (注19) の (ii) ではソウイウが出てきたが，ここでソウイウとソンナを比べてみよう。

(53) 今日はお家元のお棺の前で，三千郎さまから，千春のことは心配するな，とおっしやって頂いたんだよ[...]。これはもう新しいお家元のお約束で，千春は家元の実の妹だということを認めて頂いたことになるんだからね。こんな有りがたいことはありませんよ (有吉『連舞』p. 34～5)

コンナをコウイウに変えるのは無理がある。他方有リガタイを除くとコンナもコウイウもたとえ適当なイントネーションを与えようとしても原義を保つのがむずかしそうである。実はこの問題はII. 4. で扱う比較に属するのだが，比較自体にモダリティが入り込んでいることをとりあえず述べておきたかったのである。さて森田 (1980) は

(54) 「こんな」系統が「何だ，こんなやさしい問題か」「そんなこと，

だれにだってできるよ」のように対象を見下し軽視する態度が強いのに対し，「こういう」系統は丁重で，対象を尊重するような気持が強い（p. 147）

と説く。これはしかしすべての例にあてはまるというわけでは無論ない。(53)の他に

(55) だからせめてこれを取って頂載。そんなもの頂けませんよ，初っちゃんは断ったが彼女は相手の掌にそれを押し込んだ（福永『忘却』p. 108）

(56) A：僕ニハ昔カラノ恋人がイテネ…
B：ヘエ，先生ニソンナオ方がイラッシィッタンデスカ！

など見ていくと，問題はむしろ主体間関係に位置するモダリティではないかと考えられるのである。次に

(57) でもせめてそれじゃ帰ってくる気はあると私に言って頂載，決して無謀なことはしないって[...]。はい，あなたの言うようにします，と呉さんは尚もおどけて言った[...]。たしかにそういう約束はした。しかしそんな約束がどれだけの役に立つのか，呉さんの生還する見込がすこしでもあるのかどうか，わたしにしてもそれがむなしいことはよくわかっていたのだ（福永 *id.* p. 167-8）

を見ると，ソウイウ約束とソンナ約束が続けて出てくる。しかしここで前者をソンナに，後者をソウイウに変えると解釈が異なって来る。まずソウイウをソンナにすると，この時点で既に語り手が約束のむなしさを強調している感じがしよう。又ソンナをソウイウにすると，タシカニ…シタから続く感情のたかぶりが薄らいでしまい，文体的効果が全く異なってしまうのである。約束についてその価値を激しく問うてそれを全く拒否する，というニュアンスが消えてしまうのである。

I. 2. でソンナNをx（ノ）ヨウナNから導き出す段階をふまえてきたが，ここで比況と例示をまとめてサブクラス構築を想定すれば，拒否とはこのサブクラス全体を対象にする操作となり，x ダケデナク，x ニ比サレルヨウナNノサブクラス総テノ排除と規定できる。否定文に於てはこれが

強い否定を構成するが，(57)のように否定が明示的に形態化されずとも良いのである。次にもう一つ例をとると，

(58) 竜岡がおこれば君をあんな性格の人間とはだれが思うものかと言い，自分がおこれば，君はああいう性格の人間と自分で思っているのだねと言いかねない。ここに阪口の変な得意がありそうに思うと謙作はなお腹が立った。(志賀『暗夜行路』前編 p. 26)

に於て，アンナとアアイウが使いわけられていて興味深い。アンナではダレガ思ウモノカという反語から見られる拒否，アアイウでは…ト自分デ思ッテイルノダネで皮肉的な認容がある。[20]

さて強い否定の例を挙げておこう。

(59) a) No greater mistake than to think that because a man's tied by the leg it affects his brain pan. *Not a bit of it.* (p. 55)

b) *Nada de eso* (p. 75)

c) そんなものじゃない (p. 79)

(60) a) 'What's this?' she said. 'A parental warning against the big bad wolf?' —'No, no, Judith, *of course not.*' (p. 50)

b) No, no, Judith, *eso no*... (p. 69)

c) いや，ジュディス，そんなわけじゃないんだよ (p. 71)

(61) a) It is quite possible, even, that someone may have seen you tampering with the tablets." —'*They couldn't.* There was no one about.' (p. 113)

b) También es posible que alguien le viera mientras operaba con las tabletas. —*No puede ser.* No había nadie por los alrededores. (p. 153)

c) そんなことはありませんよ。あたりには誰もいませんでしたからね (p. 167)

この類の例は多い。又 (60) と (61) は話し相手の云った事に対する反撥だが，(59)は自分で相手に想定した考え方に対する反撥である。[21] 又

(62) a) Supposing that someone else had waited his moment, and at the exact instant when Colonel Luttrell had fired (at a rabbit), this other person had fired at Mrs Luttrell. [...] But *no, that was absurd.* (p. 85)

b) Sin embargo... *No, no podía ser* (p. 115)

c) いや，そんなことは馬鹿げている (p. 124)

では馬鹿ゲテイル，absurd からソンナを引き出すことができる。西訳の否定形はこれを明示的に示している。又 c) の肯定形を否定形にすると「* ソンナコトハバカゲテイナイ」という不自然なものになる。

ソンナコトハナイヨの肯定形は??ソンナコトハアルヨとはしにくく，むしろソウイウコトハアルヨとなるのも主体間関係モダソティの有無が決定的要因であろう。又

(63) 「心配ごとでもあるのかい？　僕じゃ相談にものれないだろうけど」「いいえ，そんなこと」(有吉 *id.* p. 136)

のようにソンナNだけで—(63)ではイイエを除くこともできる—否定を表わすことができるのである。(63)にアリマセンを補うのは便宜上のことでイントネーションとソンナ操作，モダリティ操作で説明できるのである。

(64) A：アアア，人生ハツマラナイナア！

B：マタソンナコト…！

では云ッテ，ショウガナイワネエなど補うことになるのだろうが，拒否モダリティを考えれば良いのである。又ソンナ！，ソンナア！　などN抜きで感嘆的拒否文が作れる。

以上モダリティを拒否，否定，そして注20では驚きとの関係で見て来た。これらはすべてソンナ操作の基本にあるサブクラス構築から説明可能であった。モダリティは他にもいくつか問題があるが，以下強い度合なども含めて比較について考えていく。

II. 4. 比較

ここでいう比較はまず第一に形態的解釈である。とりあえずいくつか例をあげてみよう。

(65) a) Norton sighed. He said it wasn'*t* quite *so* simple *as* that (p. 143)

b) Norton suspiró, alegando que la cuestión *no* era *tan* simple *como* yo creía (p. 193)

c) ノートンは溜息をついた、そしてそんな簡単なことではすまないのだと言った (p. 213)

(66) a) Good Lord, is it *as* late *as* that? (p. 26)

b) ¡Santo Dios! ¿Tan tarde es ya? (p. 35)

c) しまった，もうこんな時間ですか？ (p. 35)

既出(31)も参照されたい。以上は「同等比較」だが，次に「最上級」を見よう。

(67) a) Ah shure, your Honour, *best* holidays I've *ever* had in my life! (p. 76)

b) ¡Oh, desde luego, excelencia! *Jamás* en mi vida había pasado unas vacaciones *más* felices *que* estas últimas (p. 103)

c) はい，閣下，こんなすばらしい休日はいままでにありませんでした (p. 111)

(68) a) That's *the best* I can do. (p. 66)

b) Ya está. *No* puedo *superarme* (p. 91)

c) せいぜいこんなところですな，我慢して下さい (p. 95)

(69) a) He accused me of having sat about in the open air in a draught. (On *the hottest* day of the summer)! (p. 110)

b) Me dijo que hubiera debido evitar las corrientes de aire (¡y aquél había sido el día *más caluroso* del verano!) (p. 149)

c) (この夏でもこんな暑い日はなかったほどなのに！) (p. 163)

日の形態はソンナ Adj N のタイプとソンナ N のタイプの二つがある。前者はソレホド Adj N の形に書きかえることができるが，後者はソレホドノ N とするとII.3. で述べた拒否モダリティがなくなり不自然になり易い。また

(70)　ウン，太郎が戻ッテキタノハ確カソンナ時間ダッタヨ

のようなものは(66c)と異なりソレホドノ，ソレ位ノNと云うことができよう。(70)は比較的表現とならないタイプである。ソレホド Adj N は

(71)　a)　You see, I've known a case...An old brute. And when someone was brave enough to—to cut the knot and set the people she loved free, they called her mad. Mad? It was *the sanest thing anyone could do*—and *the bravest*! (p. 33)

b)　¿Loca? *Nadie* pudo intentar *una acción más lúcida*! ¡*Más lúcida y valiente*! (p. 45)

c)　気ちがいですって？　これほど正常な行為はないっていうのに。しかもこれほど勇気のある行為はないっていうのに！(p. 45)

で英の最上級，西の優等比較級の否定文に対応している。(71)のコレホドはコンナに変えることができる。又ここではコンナ Adj N をコンナニ Adj N とする事が可能である。これが可能なのはこのタイプのみで，又対応する比較表現は以上の他に such a Adj N, so Adj a N などがある。

(72)　a)　With Judith, Norton was far more succesful. He played very cleverly on the theme of useless lives. It was an article of faith with Judith—and the fact that her secret desires were in accordance with it was a fact that she ignored stridently whilst Norton knew it to be an ally. He was very clever about it—taking himself the opposite point of view, gently ridiculing the idea that she would ever have the nerve to do *such a decisive action*. "It is the kind of thing that all young people say—but never do!" (p. 174)

b)　Obró con mucho tacto...Adoptó el punto de vista opuesto, ridiculizando suavemente el pensamiento de que la joven poseyera valor suficiente para emprender *tan decisiva acción*. (p. 235)

c) 自分は彼女と反対の立場に立って，あなたにそんな決定的な行為に踏み切る勇気などあるものか，と穏やかに彼女をからかった (p. 261)

ここで Poirot が語っているのは以前にあった安楽死についての会話についてである。そこで Judith は anyone who's weak—in pain and ill—hasn't got the strength to make a decision [＝自殺する決意]—they can't. It must be done for them. It's the duty of someone who loves them to take a decision (p. 96) と云っている。さて (72) で西は tan を用いてソンナニ決定的ナ行為と解しているが日はあいまいである。つまりもしソンナ決定的ナ行為を単にサブクラス構築によりアナタノ云ウヨウナ，決定的ナ行為（又ハソレニ類スル，イズレニセヨ決定的デアル行為）とするとソンナニと交替できないタイプとなるが，他方もし西のように解釈すればこれが可能となる。日と英はこの二つの解釈を兼ねそなえたあいまいな構造といえよう。

ここで問題にするのは強い度合の解釈であり，最上級に対応する (67 c) や (69 c) では否定表現を伴なってこの解釈をとる。(53) のコンナ有リガタイコトハアリマセンヨでソンナとソウイウの違いを見たが，後者にはソレホドの解釈が付与されないと思われる。

しかし乍らソンナ Adj N とソンナニ Adj N との間に完全な同義関係を打ちたてるのは問題が残る。たしかに日常ソンナ Adj で N が欠ける表現を耳にすることが多い。

(73) ハテナ，ソンナ（ニ）面白イカイ，アノ映画？

Nが無い限りこれはニ抜けとしか解釈できないと思われる。しかし次の例を観察されたい。

(74) だが千春は，勢いよく赤毛を振り続け，花道から舞台中央へ，毛を振りながらにじり寄るという大人も顔まけの踊りを，やってのけたのである。演舞場が割れ返るような拍手であった。誰もこんな小さな子供が踊る獅子は見たことがなかった。(有吉 *id.* p. 59)

コンナニ小サナ子供に変えるとやはりニュアンスが変るようである。本稿

では触れることのできないドンナ，ドンナニでも，（ドンナ（面白イ本））と（（ドンナニ面白イ）本）の違いがはっきりしないことがある。ソンナ/ソンナニの問題は tal...que (Expresaba *tal* sorpresa su voz *que* Frankie lo miró extrañado, *Evans* p. 187) と so...that (There was something *so* unusual in his voice *that* Frankie looked at him in surprise, p. 138) のような表現に局部的対応しか示さない形態の持つようなものかもしれない。ここでソンナニの対応を見ると，

(75) a) was I sounding *very* intense? It's a matter I feel rather hotly about (p. 33)

b) ¿Me he apasionado *demasiado* quizá? (p. 45)

c) あたし，そんなにむきになってた？ (p. 45)

(76) a) We were all miserably uncomfortable, and Norton quite lost his head, hurriedly saying first that he didn't really want a drink [...] and then elaborately changing the subject and making a series of the most unconnected remarks. It was *indeed* a bad moment. (p. 75)

b) Fueron aquellos unos momentos malos, *verdaderamente*. (p. 103)

c) こんなに間のわるい思いをさせられたことはない (p. 110)

(77) a) I was saying that you *over*work poor Judith Hastings shamefully (p. 35)

b) Estaba diciendo que abusas de la pobre Judith normalmente, ya que la obligas a trabajar *con exceso* (p. 48)

c) ジュディスをあんなに働かせるなんてあんまりだって言ったのよ (p. 49)

などの強度表現が見られる。他方 such a N に対しては

(78) a) It crossed my mind that it was especially unfortunate since it contrasted in *such a marked way* with Allerton's exagerated attention (p. 88)

b) Se me pasó por la cabeza la idea de que *tan* descorteses maneras contrastaban con las finas atenciones de Allerton (p. 120)

c) フランクリンの態度がアラートンの大袈裟な配慮と著しい対照をなしているので，なおさら巡りあわせが悪かったのだ，という考えが頭をかすめた (p. 129)

のようなケースもある。

以上の観察から比較についてまとめてみよう。比較を同/異のレヴェルで操作として把える立場から見ると，形態上「比較構文」と呼ばれるものはその一部を成す。これが強い度合の表現と関係づけられる事については Culioli (1974) にそのメカニズムの解明があり，又 Tamba (1981) が異った領域で強度表現について un de ces N を扱ったことについては言及した。我々が扱う強度はNガモツトイウヨウナ特性ヲNガ持ッテイルという自己指示に基くと考えられる。即ち，ある発現がその特性により他と区別されるとすれば，問題は特性がその領域に複数のメンバーを持つようなものの場合，何らかの操作が必要となる点である。というのも自己指示とは発現がその持っている特性により己れが己れに同定されることで，しかもこの特性が他のメンバーにも共有されているならば日本語の場合何らかの方法で他のメンバーを排除せねばならない。その為にできる事の一つは比較操作により特性の度合づけをして最も強い度合のメンバーとして問題となっているメンバーを選び出すことである。(67 c)，(69 c)，(71 c) などの否定は一部西にも否定が現われるが，この排除操作の痕跡と考えられる。[22]

ソンナ Adj N の場合は Adj が問題の特性を示している場合があり明示化が行われるが，ソンナNの場合は何らかの手段で特性構築が必要である。(72) でみたように Adj を欠くとどのような特性に基いたサブクラスが問題になっているのかが不明になる事があり，この先は談話研究か文体論が介入する余地のある分野である。

III. 結論

コンナ（ニ）頁数を費しながら，殆ど又は全く触れることのなかった問題が山のごとく残っている。ここではまず論じた事をまとめ，次に論じなかったことがどのようなものかを話したい。

まず仏 tel についての仮説(2)から出発して，それを基にIでxノヨウナNからソンナNへの移行に伴う拘束を見た。仮説としてはすべてヨウダは比較操作を基にして推量，例示，一致，比況の意味を派生できるが，ソンナNに移ると推量の解釈がフィルター・アウトされ，ソの持つ照応，指示機能から(30)の分類が考えられる。しかしこれは表面的なもので，より一般的考察を行う為にソンナ操作のサブクラス構築という基底から出発し，対照的見地から後方照応，複数化，モダリティ，比較の四点に絞って諸操作を把えようと試みた。寺村(1984 a) の用語を借りればソンナNとは名詞句段階に於る「概言」であり，後方照応でさえこれが当てはまる，という仮説は，サブクラス構築という操作から考えられるものである。

複数化はサブクラス構築の仮説にとって力強い根拠となる。英，西の現象を新しく見なおす機会が得られた。

モダリティについては不明の点が残ってはいるが，拒否と呼んだモダリティは人称計算などと組み合わせてより深い研究を進めていく指針となる。

最後に比較ではサブクラス構築の後で他のメンバーの排除という操作の重要性を見た。I. 2. 3. の比況と例示の関係や，注15の (i) で見た類の表現に於る問題は後方照応の理論的解釈を要求すると同時に比較のメカニズムに光を投げかけているようである。

次に言及しなかった事柄にふれよう。何よりもインフォーマントから提出された数多くのデータのうち重要なものすべてを出せなかった事が心残りである。次にテクストの採集例にも挙げたかったものが多く残っている。これは稿を改めて論ずることにして，他方理論的に興味深い問題がまだ残っている。

ソンナ/ソンナニについては再び論ずる必要がある。キレイニ食ベル/*

キレイ食ベルがあるのにニ抜けとは何を意味するのだろうか？ しかも tal には副詞的と呼びたい用法がある。理想としては Launey (1977) のような超範ちゅう的操作が望ましいが，ソンナに関してはコソア（ド）表に終る危険が大きい。such/so, tal/tan と比べてソンナ/ソンナニは明らかに異なっている。恐らくはドンナをも考慮に入れるべきであろう。

理論上より大切なのがサブクラスの概念である。これは種々の批判に拘らず用いたもので，恐らくは特性を出発点としてもそこからどの様な厳密な操作がソンナNに表わされるサブクラスのようなものを構築できるのかが論点となる。これについては近いうちに論じる予定である。とりあえずは Carlson (1977), Langendonck (1980) などを参照していただきたい。

他方 this/that の用法についての，Channon (1980), Lakoff (1974) などの研究とソンナの関係がある。又 Rivero(1979) の referential/attributive の一般性や法の問題があり，後者については Manteca Alonso-Cortés (1981) など参照。

II.1. で Wald(1983) に触れたが new-*this* も大きな問題である。Givón などの諸研究から談話段階でソンナとどう関係する問題提起があるかは次の機会に触れたい。

Wright (1974) は古いものだが西 así の考察について出発点ともなる。日ソンナダは今回言及しなかった問題だが，考察を必要とする。

西 semejante に言及しなかったのはストイックな気持からである。又 parecido や like の形容詞的用法はより調査を必要とする。

結論を終える前に一言対照言語学の重要性を強調する。言語活動の多様性把握は一般的現象追求を前提とし，ここに始めて一般言語学が生まれる。諸言語の専門家がここで扱った，そんな A. Christie にもっと興味を持っていいのではないだろうか？

(*) 本稿は1984年7月 M. B. K. で発表した「[コ・ソ・ア] ンナ話」を大きく書きかえたものである。何よりも共同で仏 tel を扱ったF. ドルヌ，小林康夫，六鹿豊諸氏には感謝したい。M. B. K. では寺村秀夫氏はじめ参加諸氏から多くの有益な御指摘をいただいた。1984年9月には文部省科

学研究費総合研究A59310069『日仏語の基本語彙の対照言語学的研究』(代表者 野本菊夫) の一環として成果を発表し，参加者の方々の御批判を受けた。西については J. Fernández 及び A. Ruiz Tinoco 両氏がインフォーマントとして本研究の進展に重要な役割をになってくださった。又仏は本稿直接の対象ではないが，多くの西例について F. Dhorne 及び Ch. Lamarre 両氏から情報をいただいた。複数化と総称の問題については藤田知子氏との議論から多くの結果を出すことができた。I. Tamba 氏からはクラスとタイプの問題につき手紙を通じて得る事が多かった。以上諸氏に深く感謝の意を表したい。なお本稿は本誌57年の拙稿と深いかかわり合いを持つ。名詞限定とモダリティの関係追求の一環として読んでいただければ幸いである。背後には A. Culioli 氏の発話理論があるのである。

〔注〕

(1) Culioli (1983), 川口 (1982), Kawaguchi (1983), 藤田 (1984) など参照。特にドルヌ他 (1984)。

(2) 但しNの性質や述語の特性が介入してこのような事が可能になるケースについてはドルヌ他 (1984) 参照。

(3) これは少く共 Coste & Redondo (1965) などの主張である。「tal, tanto (tan), tamaño, [...] などの前，又はこれらのうち二語が組み合わされたものの前には不定冠詞を用いない。というのもこれらの語が充分に限定をもたらすのである」(p. 166)。N が固有名詞の時は un tal N が可能なことは記されているが，Graupera (1981) 参照。他方上の引用の内容は誤っている。例えば

(i) Supongamos, recurriendo a un caso hipotético que *un desconocido* de siniestro aspecto se presenta aquí semanas antes de que se cometa un crimen (*Curtain*, p. 53)

に於てイタリック部分を tal caso, un tal caso, tal caso hipotético などに置きかえることは可能で，但し機能の仕方が少しづつ異ってくる。冠詞＋tal N の組み合わせについては Stiehm (1975) 参照。

(4) Christie からの引用は *Curtain* からの時は頁数のみ示す。例文はすべて a) 英，b) 西，c) 日の順に出し，必要な文脈は a) だけにあげるようにする，又スペース節約の為改行及び引用符の用法については印刷されたものを変更することがある。なお Curtain 以外の Christie 作品の略号は参考文献参照。

(5) N_1 が数詞＋分類詞（量詞），つまり un kilo (de manzanas) のタイプは異なるものである。

(6) コーパスでは(4)のタイプ，例えば

(i) Se dan hechos y nosotros queremos conocer las pistas que a ellos conducen. Y ha sido puesta en circulación la idea de que *algunas de tales pistas* hay que localizarlas en el pasado. (*Postern* p. 153)

のようなものしか観察されていないが，algunos de los tales N も可能である。

(7) 述定関係 relation prédicative など本稿では Culioli の発話理論に基く概念を用いる。フックス＆ゴフィック (1983) 第十三章など参照。又川口(1982)，Kawaguchi (1983) のダレカ操作記述を参照されたい。

(8) 分類に於て引用する諸研究と我々の見解が異なる場合必要な時以外は一々ことわらない。要は本稿の立場を明らかにすることであろう。

(9) これは実はより複雑な問題を含んでいる。

(i) 一人の男が死人のようにぐったりとうつ伏して倒れていた。髪のぼうぼうと延びた，乞食のような男で[...](志賀『暗夜行路』前，p. 180)

乞食カドウカ判ラナイガドウモ乞食デアルラシイ男，つまり推測の解釈である。N_1 ハ x（連体節又は N_2 ノ）ヨウナ N_3 ダに於て N_1 が N_3 のメンバーでありしかも x の特性をある程度そなえてはいるがその度合判定が不確定な時起る現象で，諸 N の限定と夫々の関係，及び x の（特にアスペクト的）特性などから計算されるが，これについては稿を改めて論じたい。なお(注11)参照。

(10) 言語に於る連続性という特質を大きく生かした理論がポティエ (1984) だと云えよう。又 Pottier (1980) 参照。この見解は多くの危険を伴い乍らも言語の特性の一つを正確に把えている。本稿の立場はこの連続性の一部をとり出していかにしてこの連続性が構築されるかを探索する所にある。

(11) 以降前述したように x ノヨウナ N に推測の解釈を付与するのが N の拘束を伴うと考えるわけだが，これに対する反論が予測される。例えば湯沢(1871)，p. 499 での

(i) 私の処(ワドキ トコ)は女ばかりで，お貸もうすやうな物がござあませんけれども…

のような例について，「ただ語調を和らげて丁寧にいうための語」と ヨウナ Nを規定する類に依る反論である。本稿でⅠ.1.で「(8)の枠組はx，P，Qについて比較的厳密性を欠くような規定しか与えなかったが」と書いたが，この…ヨウナ規定も同様だろうか？　ここで問題となるのは両例に通ずる「…ケレドモ「…が」の類の表現であり，これらの痕跡の背後に人称及び主体間関係モダリティを想定すべきだと思う。古川直世，古石篤子両氏に後例の解

釈を求めたところ，「アナタハソウ思ウカモシレナイ/ソウ思ウダロウ，シカシ実ハ/ソレハソウダガソノ理由ハ…」というパラフレーズを得た。筆者の見解によると，(i) の例は後に述べるサブクラス構築以外の何物でもないが，後者の例はⅡ. 3. で問題とする評価モダリティの一類である。その背後には人称計算にかかわる共発話主体に付与するサブクラス構築と発話主体の自己を定位点とするサブクラス構築とのズレがある。この問題については川口 (1983a), Kawaguchi (1984), Aoki (1984) 及びそこに引かれる文献参照。Cerquiglini (1981), Aoki (1983), 川口 (1983b), 又理論的レヴェルとして Culioli (1984) を Lyons (1984) と比べていただきたい。x(ノ) ヨウナNが人称問題と関係する事は，寺村 (1984a) から引用したヨウダの規定から予測可能である。「真実」と判断主体の関係を計算の対象と把えれば求める問題提起となる。なお(注9)参照。

(12) 希，羅，仏，日などからこの考えを筆者に私信で提示したのは I. Tamba 氏である。又これについては古石氏と議論する機会を得た。I. Tamba 氏の問題提起は比較と preference について示唆される事が多く，又古石氏からは比較と除外についての示唆をいただいた。なお後者については Kawaguchi (1982b) での議論を参照されたい。これらの論点は A. Ruiz-Tinoco 氏の主張される通り，より数量化可能な段階での支えをいつか必要とする。残念ながら現段階では実現に遠いわけで，将来の発展を期待するしかないが，その予備段階としての諸言語を通じてのデータ整理は必要である。これについては Culioli (1979) を特に参照されたい。

(13) 「ツモリダ」の意のヨウニは

(i) 名前もだすまい。詳しくも書かないようにする (吉田 *id.*, p. 332)

のような用法だが，吉田 *id.* の云う通り推量の一つのタイプである。つまりAとその補集合 B＝A' を両方考慮に入れれば良い。他方次の例

(ii) 自分は終列車に間に合ふやうに皆と別れて上野へ向った(吉田 *id.*, p.333)

も同様の解釈ができる。つまり「意図的」などのパラメーター設定——アドホックではないような——により，本文で述べた推測の操作を述定関係に加える。なおニについては Dhorne (1984) 参照。

(14) 以下サブクラスという時は本文の(2)の意味で用いる。

(15) x導入要素 c については詳述できない。並列，従属構文，話法など多くの問題が背後にあり本稿の範囲を大きく超えてしまうからである。一言触れておきたいのが

(i) a) He's keen on birds and flowers and *things like that* (p. 69)

b) Norton es muy aficionado a los pájaros y a las flores, y *otras cosas de la naturaleza* (p. 95)

c) ノートンさんは花とか小鳥とかそんなものが大好きなんですよ

(p. 100)

の例で，b) の otras は先に述べた例示での排除操作を明示化している。しかし c) で全く同じ操作があるとは云えない。ここでのトカは c のひとつであるが，問題の複雑さを示している。全体としては Q（x（カ）（ト）ソンナ N）の類を設定できよう。この x を P（x）とおき，同定を示す抽象的な述語を考え，カをそれに加えられる操作の痕跡と見るのが可能かもしれない。ここではこれ以上この問題には言及しない。なお（i）の提起する問題については Vigara Tauste (1980) pp. 78～81 参照。並列的接続の観点からは寺村 (1984b) 参照。

(16) 直接・間接話法の相違は日本語でははっきりしない事は良く知られている。川口(1983a) 及びそこでの引用文献参照。しかしソンナNによる前方照応は，

（i） イヤッ！ト彼女ハ叫ンダ

（ii） *イヤッ！ト彼女ハソンナコトヲ叫ンダ

(iii) *イャッ！ト彼女ハソンナ叫ビヲ発シタ

(iv) ?イャッ！ 彼女ハソンナ叫ビヲ発シテ走リダシタ

に見られるように明らかな直接話法で拒否されることがある。なお話法の問題については Ducrot (1980) が示唆的である。

(17) 総称的複数については，Carlson (1977) に英無冠詞複数について興味深い観察がある。

(18) 西の esos ataques は tales ataques とも出来る。文を Es frecuente que se dan tales ataques, Se suelen dar tales ataques のようにアスペクト上の数量操作，ここではシバシバに当るもののマーカーを入れれば最も良いようである。ソンナ操作とアスペクト問題の関係は良く判っていないが，仏，西での重要性は所々で浮びあがって来る。但し仏と西の相違点に不明な部分が残っている。今英と西だけの例を見てみると次のようなケースがある。

（i） a) And the nursemaid touch? Was it always a nursemaid? (*Hercules*, p. 31)

b) Y la cuestión de la niñera? ¿*Hubo* tal niñera en todos los casos? (p. 35)

（ii） a) It did not take me long to discover that the originator of the story was Nurse Harrison (*Hercules*, p. 56)

b) No me *costó* mucho tiempo el descubrir que tal persona fue la enfermera Harrison (p. 60)

(iii) a) No one was killed. There was no man! (*Hercules*, p. 133)

b) —¿Pero el hombre...el hombre que resultó muerto...? —No murió nadie. ¡Y no *hubo* tal hombre! —Pero si yo

lo vi...! (p. 136)

この西は仏に訳しても un tel N を出せない。他方ドルヌ他 (1984) p. 39 で問題にした

(iv) Le croirez-vous ? Eh bien, un tel accident s'est *ϕ/*effectivement* produit

を基にした調査は

(v) En esta región, recientemente, hay muchos accidentes de circulación que provocan gravísimos daños, sobre todo a los niños. Ayer mismo ocurrió un accidente... / un accidete así/*tal accidente.

(vi) En este barrio suceden a menudo accidentes de tráfico que causan daño a los niños. Y ¿sabes? ayer ocurrió efectivamente *tal accidente.

という驚くべきもので，しかも

(vii) ??Las ordenadoras, le gustan a Taroo tales cosas

(viii) Las ordenadoras, efectivamente / ciertamente / probablemente / tal vez a Taroo le gustan tales cosas

のように明らかにモダリティ介入で良くなるタイプも観察されている。従って現時点では tal N の操作に不明な所があるとしか云えない。今後の研究の課題としておく。

(19) el tal N で N が普通名詞なら (3) の類である。もう一つの例をアメリカから出そう。

(i) La casilla, por otra parte, es un edificio tan ruin y pequeño que nadie lo notaría en los corrales a no estar asociado su nombre al del terrible juez y a no resaltar sobre su blanca cintura los siguientes letreros rojos: "Viva la Federación". "Viva el Restaurador y *la heroína doña Encarnación Ezcurra*", "Mueran los salvajes unitarios." Letreros muy significativos, símbolos de la fe política y religiosa de la gente del matadero. Pero algunos lectores no sabrán que *la tal heroína* es la difunta esposa del Restaurador, patrona muy querida de los carniceros (E. Echeverría, *El matadero*, in S. Menton, *El cuento hispanoamericano*, Fondo de cultura económica, México, 1964)

なお指示詞＋tal の例が一つあったので挙げておこう。

(ii) a) But what ennemies has she got?" [...] "Ennemies? Ennemies? It's so hard to define what one means by an ennemy. There's plenty of envy and jealousy in the world

my wife and I occupy. There are always *people* who say malicious things, who'll start whispering campaign, *who* will do someone they are jealous of a bad turn if the opportunity occurs. But that doesn't mean that any of *those people* is a murderer, or indeed even a likely murderer. (*Mirror*, p. 89)

b) Abundan *las personas* que aventuran comentarios maliciosos e inician campañas de murmuración. Naturalmente, si surge la oportunidad, *esas tales* no vacilan en jugar una mala pasada a la persona objeto de su envidia. Pero eso no significa que *tales euvidiosos* sean asesinos o asesinos en potencia. (p. 112)

c) いつだって人を中傷したがる者もいれば，こそこそ蔭口をきいてまわる者もいるし，自分の嫉妬を感じている相手を蹉跌させる機会を狙っている者もいます。しかしだからといってそういう連中が殺人をおかすとか，殺人をおかす可能性があるという意味にはなりませんよ (p. 142)

なお el tal N, el tal については Moliner, M. (1982-83) *Diccionario de uso del español*, 2 vol., Madrid, Gredos, s. v. 参照。

(20) 既に挙げた(9), (12), (32), (34), (40), (42), (42'), (50), (51), (52), (55), (57), (58)すべてこの段階で一応処理できると思う。他方(29)や(56)のようにむしろ驚きを表わすものがある。これは…(ノ)ヨウダで推測を考えた時措定したAとB（＝Aの補領域）を考えると，AカBカという問いに答えられない状態でAを選択する操作にBを排除する操作を加えれば推測から驚きを構築できる。基本的には疑問のカ（太郎ハ来ルカ？）と驚きのカ（ナンダ，来タノハ太郎カ！）に類似した問題である。詳述するスペースがないが，秘書が社長に名刺を渡しながら「コンナ方ガ見エラテイレマスガ…」と云うのと，「ヒドイヨ，コンナア！」の両値の計算とも平行していると考えられる。なお秘書の例は

(i) *Tal persona* pide que le reciba usted

の訳が可能で但し感情がこもるということである。但し鉛筆をさし出しながら

(ii) コンナ鉛筆ガオ役ニタツナラドウゾオ使イ下サイ

という用法については

(iii) *Si le sirve tal lápiz, use éste

が拒否されている。同様に，家を指し乍ら

(iv) コンナ家ニ住ンデルンデスヨ

についても (v) は拒否された。

(v) *Vivo en tal casa

(21) より正確な表現ではメタ言語的意味で発話状況とその派生状況を記述する必要があるが，紙数の関係で詳述できない。扱い方は色々考えられようが一つは Ducrot 的 argumentation 段階でのアプローチであろう。もう一つは発話理論に基くタイプで，Cerquiglini (1981), Aoki (1983) などが示唆に富む。人称については川口 (1983 a) 参照。

(22) Tamba (1981) の既に言及した un de ces N の感嘆用法に於る操作をそのまま日に移す事は可能だろうか？ 外界指示的な「ウワァッ！ コンナ風が吹イテル！」は良いが「コンナ風が吹イテイタ(ンダ)！」は解釈できない。これは強イなど Adj を入れても変わらない。筆者の見解では，xノヨウナNで見た解釈のうちの一致の用法をソンナダ（風ガコンナダ！）と結びつければそこからコンナ風！が派生される。外界指示がなければ，つまり対象が直接発話情況に定位されなければこの用法が成立しない。この点が日仏をへだてている。

〔文献〕

I. コーパス

A. Christie 以外の資料はテクスト中にあげた。A.Christie では，(1) Curtain. Poirot's Last Case, (2) *Postern* of Fate, (3) Why didn't they ask to *Evans?* が Fontana/Collins 版，(4) The *Mirror* Crack'd from Side to Side と (5) Towards *Zero* が Washington Square Press の Pocket Books 版，(6) The Mysterious Affair at *Styles* は Talad, Granada, そして (7) The Labors of *Hercules* が Dell Books 版である。イタリックにした部分が引用の略号となる。西訳はすべて Selecciones de Biblioteca Oro 版，日はハヤカワ・ミステリ文庫のものを用いた。

II. 研究書，論文

Aoki, S. (1983). "Note sur l'emploi de NAMAJI", *nichi-futsu-go no taishoo gengogaku-teki kenkyuu ronshuu*, Tokyo.

Id. (1984). "A propos du désidératif-*tai* en japonais contemporain", *Recherches en linguistique japonaise*, Univ. de Paris VII.

Bouzet, J. (1978). *Grammaire espagnole*, Réimpression, Paris, Belin.

Carlson, G. N. (1977). "A unified analysis of the English bare plural", *Linguistics and Philosophy, I.*

Cerguiglini, B. (1981) *La parole médiévale*, Paris, Minuit.

Channon, R. (1980). "Anaphoric THAT: A Friend in Need", *Papers from the Parassession on Pronouns and Anaphora, CLS.*

Coste, J. & Redondo, A. (1965). *Syntaxe de l'espagnol moderne*, 3e éd., Paris, SEDES.

Culioli, A. (1974). "A propos des énoncés exclamatifs", *Langue française*, XXII.

Id. (1979). "Conditions d'utilisation des données issues de plusieurs langues naturelles", *Modèles linguistiques*, I, 1.

Id. (1980). "Sur le concept de notion", Actes du colloque de Besancon.

Id. (1981). "Rôle des représentations métalinguistiques en syntaxe" *Preprints of the plenary session papers of the XIIIth International Congress of Linguists*. Tokyo.

Id. (1983). "A propos de *quelque*", in Fisher, S. & Frankel, J.-J. (eds.). *Linguistique, énonciation. Aspects et détermination*, Paris, Ed. de l'EHESS.

Id. (1984). "Théorie du langage et théorie des langues", *E. Benveniste aujourd'hui*, Paris, Société pour l'Information grammaticale.

Dhorne, F. (1984). "Différenciation, identification, la particule-NI en japonais", *Recherches en linguistique japonaise*, Paris VII.

Ducrot, O. (1980). "Analyses pragmatiques," *Communications*, XXXII.

Graupera, A. A. (1981). "Pejorative Connotations of *el tal* and *un tal*: a comment", *Hispania*, LXIV.

Halliday, M. A. K. & Hassan, R. (1976). *Cohesion in English*, London, Longman.

Kawaguchi, J. (1980). "Une construction appréciative en "il y a" de l' ancien français", *L'information grammaticale*, V.

Id. (1982). "Un grammairien japonais du XVIIIe siècle et la linguistique japonaise", *Langages*, LXVIII.

Id. (1983). "A propos de 'dare-ka + NP' en japonais", *nichi-futsu-go no taishoo gengogaku-teki kenkyuu ronshuu*, Tokyo.

Id. (1984). "Le concept de personne", *E. Benveniste aujourd'hui*, Paris, Société pour l'Information grammaticale.

Kawaguchi, J. & Rokushika, Y. (1982). "Quelques problèmes aspectuo-temporels des adjectifs en français", *BELF*, XVI.

Lakoff, R. (1974). "Remarks on *This* and *That*", *CLS*, X.

Langendonck, W. van. (1980). "Indefinites, Exemplars and Kinds", in Auwera, J. van der (ed.), *The Semantics of Determiners*, London, Croom Helm.

Launey, M. (1977). "Le pluriel transcatégoriel/-ke'/en nahuatl: contribution à l'étude de la relation "être/avoir", *Amerindia*, II.

Lyons, J. (1984). "La subjectivité dans le langage et dans les langues", *E. Benveniste aujourd'hui*, Paris, Société pour l'Information grammaticale.

Manteca Alonso-Cortés, A. (1981). *Gramática del subjuntivo*, Madrid, Catedra.
Pottier, B. (1980). "Guillaume et le Tao: l'avant et l'après, le yang et le yin", *Mélanges Valin.*
Rivero, M.-L. (1979). *Estudios de gramática generativa del espanol*, 2a ed., Madrid, Catedra.
Stiehm, B. G. (1975). "Spanish Word Order in Non-Sentence Constructions," *Language*, LI.
Tamba, I. (1981). "Un de ces...", *L'information grammaticale*, XI.
Vigara Tauste, A.-M. (1980). *Aspectos del español hablado*, Madrid, Sociedad general española de librerías S. A.
Wald, B. (1983). "Referents and Topic within and across Discourse Unit: Observation for Current Vernacular English", in F. Klein-Andreu (ed.), *Discourse: Perspectives on Syntax*, N.-Y., Academic Press.
Wright, J. (1974). "Be That Way", *CLS*, X.
川口順二 (1982). 「「ダレカ＋名詞句」について」,『芸文研究』44.
Id. (1983a). 「人称の概念について—日英仏を中心にして—」,『日本語学』II, 4.
Id. (1983b). 「中世仏語における発話文の一現象について」(書評),『フランス語学研究』17.
木村英樹 (1983). 「「こんな」と「この」の文脈照応について」,『日本語学』II, 11.
国研 (1951). 『現代語の助詞，助動詞—用法と実例』，東京，秀英出版。
佐久間　鼎 (1983). 『現代日本語の表現と語法』，復刊，東京，くろしお出版。
寺村秀夫 (1984a). 『日本語のシンタクスと意味』，II. 東京，くろしお出版。
Id. (1984b). 「並列的接続とその影の統括命題—モ，シ，シカモの場合—」,『日本語学』III，8.
ドルヌ，F.他 (1984). 「tel について I」,『フランス語学研究』18.
永野　賢 (1976). 「ようだ（現代語）」，松村明編『古典語現代語助動詞助詞詳説』，三版，東京，学燈社。
藤田知子 (1984). 「総称的 un について」，仏語学研究会口頭発表。
フックス，C.＆ル・ゴフィック，P. (1983),『現代言語学の諸問題』，日本語訳，田島宏，渡瀬嘉郎監修，東京，四修社。
ポティエ，B. (1984).『一般言語学』，三宅徳嘉，南館英孝訳，東京，岩波書店。
森田良行 (1980).『基礎日本語』，II，東京，角川書店。
湯沢幸吉郎 (1981).『増訂江戸言葉の研究』，増訂二版，東京，明治書院。
吉田金彦 (1971).『現代語助動詞の史的研究』，東京，明治書院。